



新たな技術開発を行い、製品の品質管理も徹底して行われている昭芝製作所のテクニカルセンター（玉戸工場・茨城県）。ここで生み出した新たな技術や仕組みを海外に移転し量産化していくことで、競争力あるグローバル商品が生み出される

日本にマザー会社をつくり、海外で量産する

三原佑介 (株)昭芝製作所 代表取締役社長



DATA

代表取締役社長：三原佑介
所在地：東京都練馬区小竹町
1-43-15
設立：1952年1月
<http://www.shoshiba.co.jp/>

自動車の座席やエアバッグケース関連部品など、金属プレス加工事業をメインに手がけてきた昭芝製作所。茨城や福岡をはじめ、海外にも工場を設立し、グローバルに事業を展開している。

「高度経済成長期は、親会社である自動車メーカーから受注した部品を迅速に量産することができれば、会社は成長することができました」

そう語るのは、昭芝製作所二代目の三原佑介社長だ。

しかし、1980年代になると、日本の自動車メーカーは生産拠点の海外移転を本格的に開始。受注は減少していった。その危機を脱却するため、同社は海外進出を決意する。

まず94年、生産拠点としてフィリピンに自社工場を設立。社長自らが陣頭指揮をとり、3年後には黒字化して軌道に乗せた。

この成功をもとに、2004年に中国広東省、09年江蘇省に工場を設立。現在、

海外での売上が全体売上の約4分の1を占めるまでに至っている。

「 casting やプレスなどの基盤技術だけでつくれる商品は、中国ですべてできます。日本企業がこの技術で勝負しても先はない、というのが海外に進出して得た実感です」(三原社長)

新たな工法を見出すなど、新技術を開発していかなければ、日本の下請け企業の存続は危うい。そのためにも、量産型企業から研究開発型企業への転換が一つの突破口になる。

「日本の会社がマザー会社として新技術を研究開発し、品質管理から人材育成まで行う基盤をつくる。その仕組みを海外に移転し量産体制を構築する。この流れをつくり、世界的に認知される商品をつくっていきたいと考えています」(三原社長)

同社は、グローバル化に伴った、下請け企業の新たなあり方を構築しつつあるのだ。

(株)昭芝製作所

光 彩 陸 離 会 員 企 業 紹 介